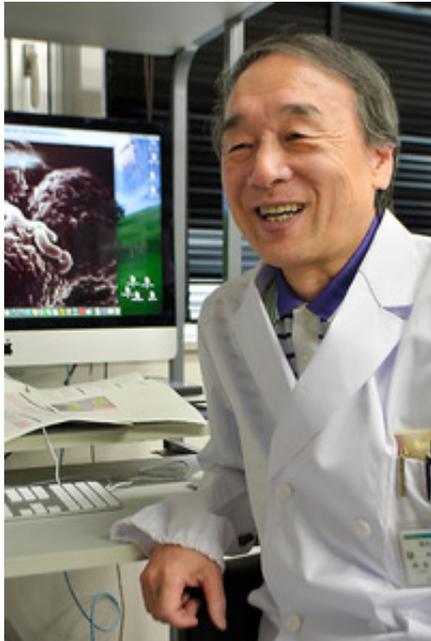


## 胃がん ピロリ菌除去で予防可能

2015年5月20日09時36分



がん予防について語る北大の浅香正博特任教授＝同大研究室で

### ■北大院の浅香正博・特任教授に聞く

国内では1970年代から毎年5万人前後が胃がんで亡くなっている。胃の粘膜にすみつくピロリ菌の除去で胃がん予防につながるものがここ数年、注目されている。研究の第一人者、北海道大大学院の浅香正博・特任教授に予防のポイントを聞いた。

――ピロリ菌に感染すると胃がんになるのですか。

「胃がん患者のピロリ菌感染率は、ほぼ98%。胃にピロリ菌が感染すると防御反応として白血球が集まり胃の粘膜を傷つけます。これがピロリ菌感染胃炎。症状はなくても放っておくと胃の粘膜が活発でなく

なり、酸がつかれなくなります。これが萎縮性胃炎で、そこから胃がんが発生してくるので」

### ■死亡者半減も

――ピロリ菌を除去すれば、胃がんは防げると。

「胃がんはピロリ菌感染胃炎を経由して発症するので、ピロリ菌感染胃炎を治療すれば、胃がんを予防できる可能性が高くなります。感染者の半数が除菌療法を受ければ、2020年には胃がんの死亡者は現在の半数近い3万人に減ると試算されています」

### ■「胃がん撲滅」

――ピロリ菌の除菌に保険は適用されますか。

「13年に除菌治療の対象が、従来の胃潰瘍（いかいよう）や十二指腸潰瘍（かいよう）から慢性胃炎にまで拡大されました。私はこの年を『胃がん撲滅元年』と名付けました。除菌すれば胃がんになる確率は下がるので、感染者には除菌を勧めています。胃がんで亡くなるのはもったいない時代になってきているのです」

## ■全員に検査を

――診断や治療の態勢づくりは進んでいますか。

「中学卒業のころまでに全員がピロリ菌の検査を受け、陽性者には除菌を推奨します。この年代で除菌すれば、ほぼ胃がんの発生を抑制できるので、公的な助成が望ましい。道内では北大や渡島医師会などが進めており、他の自治体にも広がっています」

「中高年の場合は内視鏡検査を受け、ピロリ菌感染胃炎なら保険で除菌治療を受けられます。そこで胃がんが見つければ、早期胃がんの可能性が高いので、ほぼ全員が助かります。除菌した後も、既に萎縮性胃炎に進んでいる可能性が残るので、年に1回は内視鏡検査を受けてほしい」

（小西淳一）

\*

北海道大医学部卒。同大病院長などを経て11年から現職。09年にピロリ菌の研究で朝日がん大賞を受賞。近著に「がんはどこまで防げるのか」（創英社・三省堂書店）。美幌町生まれの67歳。

## ◆キーワード

<ピロリ菌> 正式名称は「ヘリコバクター・ピロリ」。らせん形にねじれた棒状の細菌で胃の粘膜にすみ着く。汚染された水や食物が原因とみられ、今の日本では自然界にはほとんど存在しない。乳幼児期に上下水道が未整備だった中高年の感染率が高い。

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.